

東アジアの平和を求めてーポスト・コロニアルの日中関係を中心にー（第2回）

戦後の「南北格差」と「東西冷戦」をどう見るか

浅野慎一（神戸大学）

*兵庫県AALA連帯委員会『アジア・アフリカ・ラテンアメリカ（兵庫県版）』2022年1月号に掲載した記事を、一部加筆しました。

前回は、ポスト・コロニアリズムの世界観・歴史観について解説した。

これをふまえて今回は、1950年代から70年代頃までの世界の实態を、もう少し詳しく見ていこう。

さてこの時期、ほとんどの植民地は独立し、民族解放・国民主権を達成した。帝国主義の世界が崩壊したのである。

しかし、地球規模の経済格差は必ずしも解消せず、「南北問題」が大きな問題となった。核戦争のリスクを含む「東西冷戦」も、世界を危機に陥れた。

なぜ、そんなことが起きたのか。植民地支配を脱し、民族独立を達成したアジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国は、なぜ自力で経済成長を遂げられなかったのか。地球規模の経済格差は、なぜ広がり続けたのか。

この疑問に対して、1970年代頃までは「植民地時代の『負の遺産』が払拭されていないからだ」と説明されてきた。たとえば、植民地時代に宗主国の利益本位で作られてしまった歪んだ産業構造、教育や医療福祉の遅れが原因だといった説明である。しかし1960年代頃から、「それだけでは説明できない。むしろ帝国主義崩壊以後の、新たな資本主義や国民国家そのものに原因があるのではないか」という見解が唱えられ始めた。ポスト・コロニアリズムの見方である。

実際、1950年代からすでに、いわゆる「先進国（特に欧米）」では巨大資本が多国籍企業化を推し進め、国内に低賃金の外国人労働力を政策的に呼び寄せつつあった。帝国主義に代わって、国境を越えたグローバルな自由市場で利潤増殖・資本蓄積を推進する、新たな世界資本主義が確立されていったのである。

これによって「先進国（特に欧米）」では、公害を垂れ流す大量生産の工場は海外に移転され、国内の環境はいくらか改善され、エコロジーが重視され始めた。外国人労働者・移民の受け入れも進み、多文化共生の社会が模索された。そしてグローバルな資本蓄積を経済的基盤として国民的支持を調達する政治的民主主義、国民福祉、人権や男女平等を重視する市民社会も成熟していった。そのかわり、かつての大量生産の工場や炭鉱での白人男性を中心とする労働運動は、衰退していった。

一方、民族解放・独立を達成した「周辺諸国（AALA）」には、大きく分けて2つの選択肢があった。

一つは、アメリカをはじめとする「先進国」の多国籍企業を積極的に誘致し、国内の低賃金労働力を提供して、いわば「世界の工場」になって経済成長を目指そうとする「従属的工業化」の路線である。アメリカなど「先進国」は、こうした路線を奨励・援助した。この路線に反対する民衆を弾圧し、従属的工業化をスムーズに進めるためには強力な「開発独裁」が必要で、それはしばしばアメリカの援助を受けた軍事独裁政権という形をとって立ち現れた。

もう一つは、自ら独自の政治・経済圏を作り、または一国単位（「自力更生」）で資本蓄積を目指そうとする「自己防衛的な社会主義」の路線である。これは一般には「社会主義国」と呼ばれたが、実際には周辺諸国が一国単位の経済成長・資本蓄積を目指すための「もう一つの開発独裁」または「国家資本主義」でもあった。そこでこれらの国では環境破壊、民衆を弾圧する強圧的な「共産党独裁」、核武装を含む軍備増強等が推進された。

ここで注意していただきたいのは、私が今、「国家資本主義」と呼んだのは、現在の市場経済化・経済成長が著しい中国やベトナムではない。東西冷戦時代を含め、戦後のほとんどすべての社会主義国である。いわゆる社会主義国やその陣営は、ほぼ一貫して世界資本主義システムの一つの構成要素であり、周辺諸国の開発独裁の一つのタイプにすぎなかった。決して資本主義を否定・克服する社会主義ではなかったのである。

そして「周辺諸国」において、このいずれの選択肢を選ぶ／選ばせるかをめぐる争いが、いわゆる「東西冷戦」であった。

敗戦で壊滅的な打撃を受け、「周辺国」となった日本は1950年代～70年代、一つ目の選択肢を選び、アメリカ従属の下、高度経済成長・「従属的工業化」を目指した。韓国や台湾も同じである。

一方、内戦を経て成立した中華人民共和国は、アメリカに抵抗し、さらにソ連とも決別して「自力更生」による「自己防衛的な社会主義」の道をひた走った。北朝鮮もそれと似た道をたどった。

戦後の「南北格差」は帝国主義・植民地支配の残滓ではなく、戦後の多国籍企業を主軸とする新たな資本主義の産物であった。「東西冷戦」は資本主義と社会主義の対立ではなく、世界資本主義システム内部での覇権争いであった。

では、東アジア、特に中国と日本におけるその実態はいったいいかなるものだったのか。次回以降、さらに詳しくみていこう。